

未来の教育を考える会

静教組立教育研究所「未来の教育を考える会」では、これからの日本の教育の姿を考える研究をすすめています。今年度は、教育はどうあったらよいか、教え・学ぶということはどういうことか、どういう子どもたちに育てほしいか等、教育や学校の根幹・本質に関わることに焦点を当て、研究をすすめてきました。

2020年度第1回は、大阪市立大空小学校のドキュメンタリー映画『みんなの学校』を鑑賞し、参加者で議論を深めました。

第2回は、12月11日に大空小学校初代校長木村泰子さん（写真）を講師に迎え、Web会議システムを利用して講演会を開催しました。



「みんなの学校」が教えてくれたこと

～すべての子どもの学習権を保障する学校をつくるために～

講演記録

目次

1 秒先の学びは未来	1
大空の空気で育った子どもたち	3
・セイシロウのこと	3
・タイカのこと	5
・マサキのこと	6
・カズキのこと	7
子どもを主語に	9
子どもが育つ学校をつくる	11
10年後の多様性社会で生きて働く力	13
子どもと子どもをつなぐ	14

1 秒先の学びは未来

みなさん、こんにちは。

家庭でも学校でも子どもが失敗したら何か反省させることが当たり前みたいに「大人の定番だ」みたいな上から目線で子どもを反省させる。こういうことがずっと続いてきていたと思うのです。過去に自分がしてしまったことを反省するというのは、どれだけ反省しても、過去って1ミリも変わらないですよ。過去を反省するというのは、学校の学びじゃないなって気づいたんです。気づいたというか、子どもに教えられたんです。「みんなの学校」に教えられました。過去はどれだけ反省しようと、どれだけ別室指導されようと、どれだけ課題を与えられようと、奉仕活動をさせられても、その過去は1ミリたりとも変わらない。これが過去ですよ。今いる自分の1秒前は未来です。未来は過去にどんな失敗をしてどれだけ「もうこんな悪いやつ学校から出ていけ」と言われている子どもにとっても1秒前は未来。未来はどんなふうにも自分がつくっていくことができる。これがパブリックの学校の学びやなって。何かこういうところをみんなで毎日毎日雑談する中で共有したんです。その頃、テレビのコマーシャルで、お猿さんがテレビに「反省」とかするコマーシャル、皆さん知ってはりますか？そのコマーシャルから「反省はお猿さんに任そう」って、これが合言葉になったんです。私たちは未来を生きているし、子どもは未来に向かって失敗をやり直していく。これが学校の学びやなって。子どもは地域のパブリックの学校で自分のありのままを出すから友だちのありのままとぶつかる。ぶつかったら毎日トラブルが起きるのはあたりまえなんです。このトラブルを生きた学びに変えるか、このトラブルをいじめに変えるか、これが私たち学校の教職員、主に教員の仕事やなって。トラブルを起こさない学校をつくっていたら、頑丈なスーツケースに子どもを入れているのと同じ。学校から放り出されてスーツケースの蓋が開いたら、「雨降ったらどうするん？」「何か想定外のことが来たらどうするん？」ってなってしまう。こんな話を毎日職員室で雑談していました。

大空小学校（以下、大空）で大事にしていたのは、言語化です。「みんなで言語化しよう」と。言語化せえへんかったら、職員室の30人がそれぞれ、自分なりの主体的な子どもをつくろうやっとなる。実は15年前も「自主的な子どもをつくっていたらあかんで。主体的に行動する子どもをつくろう」って、ここからみんなですすんだんです。「主体的な子ども」と「自主的な子ども」の違いって何でしょう。主体的って言われたら、「はいはい。じゃ、主体的な子どもをつくるために授業をしよう」って、先生たち思うかわからへんけど、30人が30通りの「主体的な子どもの姿って、こんな姿よね」なんて、ばらばらで思っている、どうにもなれへんわけです。子どもは担任の先生の教育を受ける。これが今までの小学校教育。担任の先生が当たりやったら、この1年楽しいって。でも、はずれやったら学校に行けなくなって苦しむ。次の先生になったら、ようやく学校に行けるようになった。こんなパブリックの学校をつくっていたらあかんって。こういうことを、開校当初にみんなでいっぱいしゃべったんです。

大空がスタートしたときも、何か学校の決まりとか、校則とか、学習のルールとかそういうものをいっぱい背負って大空に赴任して来た教員たちばかりやったんです。そんな先生たちが集まって、自分なりに授業をするのに、まず、「座り方はこう」「机の上の物の出し方はこう」「発言するときは、当てられて、返事をして、椅子を入れて、それから

発言しなさい」って。こういうマニュアルを、それぞれの教員がそれぞれ持っているわけです。「先生の言うことを聞く子どもをつくっていたら、子どもらの10年後の社会、通用せんで」が口癖でした。自主的って、例えば「廊下は右側を歩こう」ってルール。「右を歩きなさい、右を歩きなさい」という先生、開校の1年目、当然大空にもいたんです。でも、学校には、重度の知的障害や自閉症スペクトラムなどと診断され、右と左が分からない子がいるのがあたりまえですよ。開校1年目に6年生で入ってきた子どもは1年生の2週間目から5年生までの学校の学びから排除されて出席0です。6年生で突然入ってきた。この子は言葉もまだ多くをもっていないし、みんなの中で育ってないからみんなの言葉は理解できない。廊下を「右側を歩きなさい」って言っても歩けないんです。この子が廊下を歩くには、いつもこの子が周りに迷惑かけへんように、支援担当とか介助をする人が横について右側を歩かせへんかったら学校を自由に歩かれへん。果たしてこれでいいのかな。右・左わからん子が向こうから左を歩いてきたら、右を歩いている子とぶつかるやん。ぶつかったら、左側歩いている子が悪いやろって。ルールは右側を歩かなあかんから。実際にこういう1年生がいたんです。「あんた、あのお兄ちゃん歩いてきたらぶつかる思うたら、あんたが左歩いたらいいやん」って私が言うと、その1年生の子は、私の顔を見て「左は歩いたちゃだめなの。右を歩かないとだめなの。校長先生は間違っています！」とか言って1週間口きいてくれなかったんです。私の顔見たら「ふん！」とかして。「あんたさ、右側歩かなあかんって、誰に教えてもらうたん？」って言ったら、「幼稚園の園長先生は、毎朝『みんな右側歩きましょう』って言うから」って。

でも、こうやって女の子に言われたことを、その日の放課後、職員室で話したんです。「なあ、私、今日こんなこと言われてん。どう思う？」とか、こういう話から右側を歩くという正解。正解を教員が与えて、この正解を先生に言われなくても自らすすんでやっていく。これがこれまでの「自主的な自ら学ぶ子」ですよ。これからは「主体的」って変わっているわけです。「『自主的』と『主体的』の違いはどこや？」って15年前に雑談しました。「何のために右側を歩くんやろう」ってという言葉が当然出てくるじゃないですか。「何のために右歩くん？」って。「それはぶつからへんためでしょう」「じゃあさ、『右側を歩け』という正解を与えるのではなくて、『廊下はぶつからんように歩こう』」ってしよう。ぶつからへんように、ここは走る、ここは歩く、ここは譲る。そうやって他者とぶつからないように移動する。これが、「おはよう」から「きょうなら」まで、学校という学びの中で1人の子どもが、自分なりの考えで自分が判断して行動していく。これを「主体的」と言うんちゃう？たとえ子どもが主体的に行動して困ったことに会ったり失敗したりしても人のせいにはしないんですよ。自分で考えて失敗したら「失敗した、やり直す」って言えます。失敗はやり直せばいい。それが未来なんです。こんなことを開校1年目から毎日のように職員室で雑談をしていました。「1秒先の学びが未来やな」って。

東京の麴町中におられた工藤校長と、先日も一緒にオンラインでセミナーをしたんです。工藤さんは、OECD、国際社会、未来の教育、未来の学校とか、すごいビジョンをいっぱい出してくれます。それも、ものすごい大事やと思うんです。でも、子どもの足元の1秒先を子どもが失敗しながらでも自分の足跡を未来に向かってつくっていく。「この両方が必要やね」って、この間も二人でそんな話をしました。

大空の空気で育った子どもたち

実は私、これまで静岡県に何回か行かせていただいて、私の中では、すごくあったかい憧れの場所なんです。富士山があるし。いろんな人にとってもあったかくしていただいた出会いがあって、「静岡ってありがたいよな」って、今日もそう思っているんです。これまで対面で講演やセミナーとかに行き行って学ばせてもらっているときには、PowerPointなんて作ったことなかったんです。「パワポ作るのやったら、私来んでええやん。パワポ見て配付資料渡して、みんながそれぞれ考えてくれたら、そんでええちゃうん？」って、いつもそんなふうに思っていた人間なので、パワポは作ったことがない。こういう話を大空の元同僚たちにしたら、「いやいや、よう作らんだけやろ」って言われるんですけど、そう言われたら、まあそれもあるという私です。

でも、オンラインに変わってから、新しい自分をやっぱり見つけなあかんと思って、パワポを作るようになりました。だってホワイトボードもないし、双方向の対話もない中で一方的に下手な授業をすすめていくみたいな、先生が1人しゃべる授業ほど子どもにとって、大空の子どもたちは「役に立たん」って言うんですけど、そんな授業になってしまいうんです。今日皆さん方と学びたいなという思いからパワポを作ったので、最後まで伝えます。そこから皆さん方は、ご自分の考えで、いろんなことを質問していただけたらありがたいと思います。

事前にいただいた質問の中でね、「その後の子どもたちとか、あの映画に映ってへん子どもたちって、どうなっているの」って、そういうお声もいただきました。

・セイシロウのこと

皆さん、この子、覚えてくれていますか。セイシロウです。3年生まで同じ大阪市の学校にいました。幼稚園のときに「この子はちょっとみんなと一緒にできひんから、病院に連れて行き」って言われて、発達障害という診断をもらいました。就学時健診のときに、「通常の学級に入ったら支援してもらわれへんで。特別支援教室で学ぶんやったら、セイちゃんに合った支援してもらえるよ。お母さん、どっちを選びますか」って聞かれました。大阪市は、「親が選択しい」って、すすんでいるのかわからないんですが、「通常学級に入りたい」と言っている親に、「ここではあんたとこの子、支援してもらわれへんで。理由は人が足らんから。担任の先生1人しかおらへんから。でも、特別支援学級やったら人がもらえるから、特別に支援してもらえるよ。どうする？」って。こんな二項対立の辛い選択を親にさせるって、私は間違っていると思っています。学校を選択するのではなく、困ったら自分で自分の学びの場所を見つけていけばいいんですよ。学ぶのは子どもですから。

映画のときは、4年生の姿やったんです。「こんな学校ぶっ飛ばしてやる」って言っていたセイです。セイシロウは、教室に入ってみんなと一緒にいると、とても安心して、寝転がって廃品を集めて工作をしていたんです。時限爆弾を作っていました。その時限爆弾を、4年生の終わりに校長室へ持ってきてね「校長先生、僕がこのスイッチを押せば、校長先生は誰よりも早く一番に死にます」って言いに来たんです。

そのセイシロウが、3年間、大空の子どもたちや、いろんな多様な大人と、彼自身が学んだんです。卒業式は、ラストメッセージをみんながノー原稿で、そのとき自分の思った

言葉で伝える。これが最後の授業、卒業式なんです。だから、「コロナで卒業式できひんで」言うたって、大空の子どもたち、全然へっちゃらなんです。「1か月後に、じゃ、卒業式」って、十分可能なんです。最後の授業ですから。卒業式の彼のメッセージに私たち、ひっくり返りました。事前に下書きとか原稿とかあえて書かないラストメッセージですから、セイちゃんの言うことを誰も知らんのです。「セイが困ったら、私、出て行かなあかん」って、思っていたんですけど、とんでもなかったんです。「みなさん、人にとって一番大切なのは平和です」って、彼は言いました。私たちひっくり返りました。「平和ってね、とっても簡単なんですよ。だってね、今自分の隣にいる人を自分が大切にすれば、一瞬で世界中の人が大切にされます。みんな、ありがとうございます」って、彼は、義務教育の最後の日に、他者に向かって「ありがとう」という言葉を初めて伝えたんです。

このセイちゃんは、今高校3年生になっています。中学校は特別支援学校を勧めてくれたんですが、彼は「僕は公立を受検します」って、公立高校を受検して、すべりました。そのときにメールが来ました。「高校、落ちた」。それだけのメール来たから、私は一言だけ返事返したんですね。「次は？」って。彼はそこから、「ああ、そうか。次を考えるのを忘れていたな」って悩み始めて、キャリア教育を学べる通信制の高校を選んで、毎日高校に通っています。

2018年の2月に、東京大学で、文科省の局長や特別支援教育課の課長や東京大学の教授たちが集まって、今のインクルーシブ教育の方向性はこれでいいか問い直そうというシンポジウムがあったんです。そのシンポジウムにセイシロウが登壇しました。セイシロウは、ノー原稿が習慣やから「今思ったことを言えばいいんですね。校長先生、そうですね」って言うから「そうや。思うたこと言うだけや」「じゃ、大丈夫です。僕行きます」そんなやり取りがあって、彼は行きました。俗に言う偉い人たちの前で「皆さんの考えは間違っています」って言い切ったんです。何か、会場中から、何ともいえない笑い声と拍手と驚きと、いろんな空気が伝わってきたんです。そこで彼が言ったのは「皆さん、障害を治すもんだと思っていますか。障害者は健常者に迷惑をかけないように、いろんなことを教えてやらないと、社会に出て困る、自立できない。そう思っていますか」って。「僕は発達障害という障害をもっています。でも、この発達障害っていう障害は、僕の個性なんです。個性はね、治すもんじゃありません。個性は伸ばすもんでしょう。障害は病気ではありません。病気やったら、僕、治せるんです。でもね、『みんなが椅子に座るからセイシロウも椅子に座れ』って言われても、椅子に座っていたら、息できなくなるんです。でもね、走り回っていたり、床に座っていたりしたら、みんなと一緒にすごく学べるんです。これが僕なんです。『我慢して椅子に座れ、動くな』って言われたら、僕は学校に行けなくなります」

彼はそうして、3年生まで、1人の先生が特別支援学級でセイちゃんに手厚い合理的配慮をしてくれていたのに、学校に行かないどころか、学校を恨むようになったんです。このセイは、「僕はね、前の学校がとても苦しかったし、前の学校を恨んで大空に行った。大空に来たら、何かわからへんけど毎日学校に行けた。何かわからへん間に、僕は今高校生になったんですが、今になってようやく分かった」って言ったんです。「大空は、僕の周りにいる友だちが、周りのみんなが『ああ、セイちゃんそう思うの？』『セイちゃん出ていったん？』『セイちゃん帰ってきたん？大丈夫か？』って、僕が僕らしく学校で行動

することを、そっとしてくれたんです。僕を認めてくれたんです。だから僕は毎日楽しく学校に行けたんです。1年生から3年生までの学校を僕は恨んでいました。けれど今考えたら、学校に行けないのを人のせいにして恨んでいる。こういう経験をしたからこそ、今の僕があるんやなって、今は前の学校にとっても感謝しています」って、東大で彼はしゃべりました。「僕は、中学も高校も、みんなと一緒にできないし、突然声を出したり、突然動いたりするから、中学校では『出ていけ』って言われたこともあったし、先生に『邪魔やからあっちのお部屋に行きなさい』って言われたこともあった。でもね、どうってことなかったんです。そういう人たちを僕が『この人たちは僕をいじめる人や』って思わなくなりました。『ああ、そうか。そう思うこともあるやろな』と思えるようになった。それは、大空で、僕の周りの人が僕を認めてくれた。ということは、僕も僕と違う人たち、僕以外の周りの人って、全部違う人たちなわけですよ。僕と違うことを言う、僕と違う人たちを自分自身も尊重せなあかんねんって。このことを学びました」彼はこういうことを言っていました。

障害は個性です。個性は長所に変える。そのために、周りの人たちを自分は大切にすればいいんだって。「これが大空で学んだことです」みたいなことを彼は言っていて、何か頭が下がる思いをしました。

・タイカのこと

この子、覚えてくれていますか。この子は、マスクをしていたタイカという子です。暴力を振るったマサキが「ごめんな」って謝りにいったら、この子が殴ったんです。タイカは、卒業の3日前かな。「校長先生、あの映画は、僕は反対や」って言いに来たんです。「私も反対やから一緒やな」って。でも、そのときにタイカが「俺より校長先生、ましや」って言うんです。私、映画に出ている姿は「もっと優しい、ええとこいっぱいあるやろう」と本当に思っているの、それをタイカに言うと、「俺よりまし」って。映画が、芸術祭大賞やいろんな賞取ったから、NHKの8時のゴールデンタイムに全国放送されたんです。タイカは家で、家族と一緒に観た。親戚の人も観た。一斉に「マサキって、暴力ふるうあいつ、何とかならへんかなって思っていたけど、マサキってええやつやな」って。「それに比べてタイカ、おまえは、謝りにきたやつを殴るって、どういうことや」って、みんなにいっぱい言われた。「校長先生、俺のことわかっているよな」って言うから、「わかってるよ」って。実はタイカは、6年間の中で、人に暴力をふるったのは、あれが最初で最後なんです。それも事実。「映ってないところにもいっぱい事実があるっていうことを、私のこの口でみんなに言うてあげるからな」って、ちょっと気休めに言うたんですけど、タイカは「ほんまに言いふらしてや」って言うたので今も言っているんです。

彼は就学時健康診断できなかったんです。母の元を離れるのが嫌やからって。それが彼の大空でのスタートやったんです。私たちは、専門家のアスペルガーとかADHDとか、こういう言葉は信用しませんでした。そんなん信用していたらえらいことになるなって今も正直思っていますが、そんなん信用するより、学校に来てタイカが困ったら、「困っているタイカが困らへんようになるために私ら何ができるんやろう」って。そのことだけを考えればいいわけですよ。医学モデルのように「アスペルガーの子には」とか「ADHDの子には、こういう指導を」とか、そんな話は、子どもを「障害児」というくくりにはめてしまう。

「ダウン症の子」なんて一人もいない。ダウン症のAちゃん、ダウン症のBちゃん、ダウン症のCちゃん、全部違うんです。「困っていることが困らなくなるようになったらええねんな。そうか、ダウン症か。ああ、ダウン症っていうのはこういう障害なんやな。なるほど、今この辺に引っかかっているかな」って、自分たちの教材研究にすぎないと思っています。

こんなタイカだったんですが、中学に入ってやっぱり行きづらいこともあったんですが、小学校のときからサッカーが大好きで、今高3で、スカウトされてJリーガーになりましたよ。

・マサキのこと

これが映画の中でタイカに殴られたマサキです。2分の1成人式で「殴りたくない」って泣いた子です。言うことを聞かなかったマサキは親に殴られていました。小学校に入って自分が困ったら、気がついたら友だちを殴っていたわけです。「暴力をふるうのは絶対あかんで」って、これ正解です。職員室でいつもみんなで悩んだのが、「暴力ふるうたらあかんで、こんな誰よりもマサキが一番知っているよな。この正解を私らがマサキに指導すれば指導するだけ、マサキは自分を産んでくれた親を、『ああ、母のやっていることは犯罪やん』って思わすだけやな」「ならどうしたらええやろう」「マサキが、どうしたら殴らなくて済むやろう」って。彼は、山ほどやり直しをしました。彼が卒業するとき「俺以上に暴力ふるったやつおるかな」って聞いてきたから、「どう思う？」って聞いたら「おらんと思う」って言いました。「でも俺が一番やり直しの力がついた」と言って卒業しました。彼は今、高校3年生になっているんですが、このコロナ禍で、母から長い手紙が来ました。「マサキは中学校に行ってから、ただの一度も暴力、暴言ふるってないんです。テニス部のキャプテンになって、『俺の宝物は友だちや』って。信じられへんでしよう、校長先生」って書いてありました。彼は今、大阪の大学を受検するために頑張っているそうです。彼は小学校のとき、いつも横にいてたレンという男の子を、いっつも悪くないのに突然殴っていたんです。中学3年のときに、「俺、勉強わからへんから、レン、教えてくれや」って言って、レンが家庭教員になって2人で一生懸命勉強して、大阪の進学校に2人が入学したんです。こんな関係が続いているわけです。手紙に書いてあったのは、「俺が今あるのは、大空の大人たちのおかげ」ここに校長や教員なんて出てこないです。大空の子どもたちにとって、いつも職員室にいるのは、もちろん私たち教職員もいますが、地域住民、友だちの母ちゃんや父ちゃん、外部の人。こういう人がいつも職員室にいる「大空の大人」なんです。学校にいる大人は、自分たちの味方と、誰もが信じているんです。

このマサキが、友だちを殴って、もう殴らへんためのやり直しを、彼自分で考えました。反省いうたら罰与えるけど、私ら、やり直しっていうのは本人が考えるから。彼は、自分でやり直しをするのに、1か月間机と椅子を持って教室から離れて「職員室で俺は勉強する、やり直しする」って、職員室に居座ったことがあるんです。それは「教室で友だちを見なかったら俺は殴らんで済む」後で気づいたのは、本人の逃げやったんですけど。そのときに、職員室にはしょっちゅういろんな人が入ってくるから、入ってきたら、みんなが同じようにマサキに声かけたんです。「マサキ、何してんねん、そこで」って言うと、マ

サキは「俺、やり直ししている」って言うんです。みんながね、「マサキ、あんたはええ子やで」「マサキはいいやつやで」「あんたはええ子やで」「あんたのやっている行動が間違っているだけやで」「やっていることを変えるだけでええんやで」「おまえはええやつやで」「あんたはええ子やで」って、言っていってくれた。「この言葉が、ずっと俺の中に、何か『もうどうでもええわ』とか思ったときに、ずっと俺の中にあるねん」って、彼はそう言ったそうなんです。「だから俺、みんなのおかげやから、俺みたいなやつ、今いっぱいいてるから、俺は大空の大人たちにやってもらったことを、先生になって返さなあかんなと思っている」って、つぶやいたそうなんです。どんな道に行くかは彼が決めることですが、その言葉を今のマサキがつぶやいたっていうのが「ああ、大人、頑張らなあかん」って、私は思ってしまう。

・カズキのこと

この写真、これは、あのぼろぼろの服で卒業式を迎えたカズキです。カズキは、「地域の人を回し蹴りしたんか？」って言うたら、「してません」「何したん？」って言ったら「ただ蹴っただけです」とか言うた子です。カズキは、大空での9年の中で、一番困り感をもっている子どもでした。貧困、学習障害、親の虐待、教員の体罰。これ以上ないやろという子どもの困り感をすべて背負った子どもです。たまたま生まれた家が貧困やった。1週間、10日食べる物がないうんて当たり前やし、両親おれへんようになるし、ごみ屋敷やし、ランドセル開けたらゴキブリ出るし。親の虐待って半端じゃありませんでした。

大空から行く中学の校長先生は、しょっちゅう給食をカズキのグループで食べて「おまえ待っているぞ」とか言って、カズキが臭いことも知ってくれていたし、物がないうんも知ってくれていました。でも、突然母ちゃんが、全然知らんところの地域に、父ちゃんと別れて、引っ越しちゃったんです。カズキは全然知らん公立の中学に行くことになりました。大人同士の引き継ぎ、文書の引き継ぎ、何の役にも立ちません。その中学で、彼はとんでもない生活指導の教員から体罰を受けて「もうあかん、限界やな」って、自立支援施設に入れました。「寮生活でもう1回、寮母さんも寮長さんもいる中で、安心して中学校、学びや」って。

3年生のときに、私は彼に呼ばれて初めて行ったんです。いろんな話をしました。あの子、体育館シューズもないし、靴下白って決まっているけど、自分一人でちゃばちゃばって、汚い白の靴下しか持ってへんから、もうねずみ色でどろどろなんです。生活指導の先生に「体育館シューズ」って言われて「持っていません」って言ったら「うそつくな」って言われたんです。「靴下は白やろ」って言われて「これ白です」って言うたら、この生活指導の先生が、1年生全員いる講堂で「おまえの目はどうなっている」「うそつくな」みたいなことを言われて。でも、うそじゃないんです。本当なんです。

彼ね、中学校に入学した4月に大空へ「心配しているやろ」って帰ってきたんです。2年目の若い教員が担任で「『おまえ、物なくても、宿題せえへんでも、何もなかつてもええから、学校だけには来い。俺がおまえを守ったる』」って、こう言うてくれてんで、俺の担任」って。「よかったな」って言っていた6月の話なんです。カズキ、言いました。生活指導の先生が「どこまでうそつくな、出てこい」って、座っているカズキの後ろから体操服の襟を引っ張って、がっと引きずり出そうとして、彼は行くの嫌やから、ずっと我慢

していたんです。で、結果的に首絞まって意識を失って倒れた。これが体罰なんです、彼ね、生活指導の先生をいっつも恨んでないんですよ。次の日から彼、学校に行けへんようになってんけど。「あんた、なんで学校に行けへんようになったん？」って言うと、カズキいわく「生活指導の先生と俺との間に、担任の先生いてくれててん」って。「でもな、担任な、俺の靴ないのも知っているし、靴下白なのも知ってんねん。でも何も言われへんかってん。この担任の先生、俺のこと守りたかったに違いないのに。けど生活指導の先生って、学校の中で、すごい年上で立派な偉い先生やねん。俺の担任若いねやんか。立派な先生が言うてるのに、『先生間違ってます。こいつ持っていません』って言われへんかったと思うねん。だから次の日、『俺守ったるで』言うてくれた担任、俺の顔見たら困るやろうなって。俺、担任困らせたらかん。俺は学校に行ったらあかんって。そこから学校に行かないことを決めてんけど、合うてた？間違うてた？いまだに分からん」。これがカズキが私を呼んだ理由やったんです。中3のときです。

ここから彼は「もう1回勉強をやり直そう」とエンパワーメントのコースをつくった大阪の公立高校に合格しました。そして、施設から自転車で高校に行って、大空に帰ってボランティアをして、施設に帰る。こういう生活の高校3年間。その卒業式の写真なんです。この卒業式で、私が一番驚いたのは、高校3年間、皆勤だったんです。小学校の時、朝「起きろー！」って管理作業員のヨシトが迎えに行き連れてきていたカズキが、無遅刻、無欠席、無早退で卒業しました。卒業式は1時間半ぐらいあったんですが、びくとも動かず、ものすごい立派な姿で彼は立っていました。私自身が大空を出てからは、卒業式や入学式の案内いっぱいもらうんですが、ただの一度も行ったことないんです。もう私は3月30日で去った人間ですから、過去の人間です。過去の人間が今をつくっているところに行くと邪魔なだけです。もちろん気にならへんことはないですよ。でも、過去の人間は、それこそその役にも立たないんです。だから一切行っていない私が、カズキの卒業式だけ行きました。入り口で、カズキの名前の横にね、「祖母、泰子」って書いて。

「カズキ、あんた頑張っているな。すげえな」「小学校のときのあんたと全然ちゃうで」って私が言うとね、「俺な、今夢が2つある」って、彼言うんです。1つは、「しっかりお金ためて、大空の地域で家を持ちたいねん。大空の地域の人に、俺は命守ってもらてる」私ら、さよならって家に帰ってしまったら、自分の地域に帰るわけですよ。カズキが親に暴力を振るわれていても、私は校長でありながら、カズキの命は守れない。これが所詮校長です。でも地域の方は、カズキのことを毎日学校に来て、「あんた行けるか？行けるか？」って。「やられたら大きい声出しや。夜中散歩に行つたらかな、犬連れて」って。カズキが大きい声出したら、警察へ電話してくれるんです。警察が飛んできて、緊急保護してくれます。命は助かるんですよ。彼は十数回、子ども相談センターに緊急保護されました。でも、ごはん食べられる、お風呂入れる。けど大空ない。「親の虐待は、俺我慢できんねん。だから大空に帰りたい」って、毎回帰ってくるんです。

この子のもう1つの夢は「俺、学校の先生になりたい」こう言いました。みんな同じようなこと言うんですよ。ほかの子も学校の先生になっている子いっぱいおるんです。周りにいる施設の子は、みんな学校を恨んで親を恨んでいるしい。でもこの子は、虐待をした親も恨んでへんし、体罰をした教員も恨んでないんです。「俺を守ったる言うてた担任の先生を、何か困らせたらかん」って。「こんだけ困り感をもつ子が、なんで人を恨ま

んと？」「そんな子どもら助けたいやろ。だから、やってもらったことやって返さなあかんから」でも、これがカズキだけじゃなく、子どもの本能ですよ。

子どもって、やられたらやり返しますよね。でもやってもらったらやって返す。この子どものころの人との関係性っていうのは、やっぱり小学校の6年間、中学校の3年間に育つ。だから義務教育っていうんでしょうね。この義務教育の間に、親がなくても、他人であろうが、非認知能力を存分に自分の中に空気として吸い込んでいたら、それが自分の中で根っこを生やすから、どんなことがあっても、何か幸せに自分になっていくんです。「教育格差」みたいな言葉はなくなっていく。アメリカの論文で、こういうことを研究した論文も本になっていて、私はそれを読んで、子どもの事実から納得したんです。

子どもを主語に

今回のコロナで、見事に蓋をしていた根深い日本社会の問題が蓋を開けました。障害、部落、貧困。この根強い差別と排除の文化。NHKで、ある小学校の道徳の授業が、とても称賛されて映っていたんです。「コロナ差別をなくそう」というテーマでした。「コロナにかかった人を差別してはいけません」という道徳なんです。もちろん否定するつもりは一切ありません。でもね、コロナにかかった人って、未知の病で、薬もなくて、突然死の恐怖に陥れられるわけですよ。「それだけ困っている人を差別する今の日本社会って、一体何やねん」「『コロナにかかった人を差別したらあかんで』みたいな授業をせなあかんような義務教育って何やねん」としてそのことを問い直す必要があるのではと強く思いました。

これまで、違ったものを排除したり「みんなと違っていたらあかんで」って言うたり、「迷惑かけたらあかんで」「迷惑かけない大人になれ」って言われ続けて「助けて」って言われへん大人がいっぱいいるわけです。迷惑って、迷って惑っているんです。要は困っているんですよ。「迷惑をかけるな」という、特に教員や親の言葉。この言葉を、子どもたちはどう受けるのでしょうか。困っている子どもを「困る子や」ってとっていきしかないですよ。みんなができて当たり前。「規律守るの当たり前。規律守る子が普通で、守られへんのは特別」こうやって、何かくくりに入れて分断していく学校って何やねんって、今回パワポを作りながら怒りを自分の中でもつんです。でも冷静になったら、「そんな大人をつくってきたのは誰ですか」って。俯瞰的に自分を見たら、「ああ、私です」って。私は45年間、もう50年ぐらい前からずっと小学校現場で「学校の先生」をしてきたわけですから、「すべて自分に返る言葉やな」って受け止めています。「だから、今からでもちょっとでも気づいた人間が、人のせいにせんとやり直ししていこうや」って思っています。でも、日本中のまあ世界中でしようが、何より大切なのは命やっ気づいています。

今日いただいたテーマがここなんです。皆さん、この「649」という数字は何の数字とご思いますか。10秒考えてください。——これね、2018、19年。去年、一昨年、たったの2年間で、子どもが自ら命を絶った数です。児童・生徒（中・高）です。私たち学校教育に関わっている人間って、子どもの命があるから仕事できるんですよ。「きよなら」って家に帰った子が、次の日「おはよう」って来てくれなかったら仕事ができないのです。とり返しのつかない失敗のないために、毎日とり返しのつく失敗をしながら職員室のみんなでや

り直しをしていけばいいのです。

いじめ、不登校、過去最多。いじめ防止条例ができてから、いじめが過去最多。変じゃないですか。不登校、過去最多。インクルーシブ教育をと言ってから、今どんな状況かというと、特別支援学級に在籍する子どもの数が3倍に増えている。インクルーシブっていうのは、誰一人排除しない、これだけです。私たちは、その子に学力をつけてやることなんてできないし、「先生がいい先生やからね、安心して来られるでしょう」みたいな名人芸は今もう通用しないのです。

子どもが学校の中に自分で安心する場所を見つけて、子どもが自分で学ぶ。これが主体的でしょう。だから自分が獲得した力は大人になっても逃げないし、うまくいなくても人のせいになくて済むのです。数年前から「インクルーシブ教育を」って言っているのに、なぜか通級、交流、これをやるのがインクルーシブやって。それでインクルーシブやったら、特別支援学校へ逃げていく子どもはそんなにいないじゃないですか。

映画『みんなの学校』が5年前上映されたとき、講演会に特別支援学校の先生たちが時々いらっしゃって、その先生たちがとても強い口調で、「『みんなの学校』は、特別支援学校は要らんとってんのんか」って怒られることがよくありました。そんなこと思ったこともなかったんですけど、「地域の学校で、酸素ボンベもないし、温度調節もできひんし、地域の学校で学ばれへん特別のニーズが必要な子どもが学んでいるのが特別支援学校やから、その力が全部地域に融合されたらものすごいええなどは思っていますよ」って。「でも、それが今無理やねんから、特別支援学校のニーズはとても大事やと思っています」って答えていたんです。5年前は、特別支援学校の先生たち『みんなの学校』に、結構「反対や」って行動される方が多かったです。ところが、最近は、特別支援学校の先生たちや保護者の方が『みんなの学校』を上映されて、『みんなの学校』を広めようって自分たちで対話の場を持っておられるんです。それはなぜかというと、地域の学校にニーズがある子どもが、「いじめられるから」「みんなと一緒におられへんから」「特別の部屋にいてたら地域の中でとても生きづらいから」そんな理由で、うちの子どもは特別支援学校で学ばしてほしいってなっている。その子どもたちは「ちょっと勉強ができてにくいよな」ってただそうです。そういう子が、次から次に診てもらって手帳を取って「特別支援学校で手厚くね」って来る。この5年間の変化はとても大きいと思います。

地域の学校って、すべての地域の子どもの、まずは「安全基地」じゃなかったらあかんでしょう。特に今は、家に居場所のない子どもがたくさんいますよね。家に居場所がなかったら「助けて」って飛び込んでくる地域の学校がなかったら子どもはどうすればいいですか。学校に居場所のない子がどんどん増えています。学校が変われば「安全基地」になれば子どもは来れる。だからこそ、過去の自分たちの学校づくりや指導を否定するんじゃないくて、先生たちって、自分が否定されるように思うねんけど、そうじゃなくて、これだけ想定外の危機に遭遇している今は大きなチャンスです。過去はもうええねん、1ミリも変わらへんから。でも1秒先を、新しい発想で何かつくろうよって、今まで一生懸命子どもを育ててきたんですよね。でも、子どもを育てているつもりでも、子どもが育ってなかった。子どもが育っていたら、自ら命はなくしません。649の数は0になるんです。もう同じ失敗はやめませんか。

子どもが育つ学校をつくる

「子どもが育つ学校をつくる」ためには、子どもを主語にした学校をどうつくるかです。これまではやっぱり、先生が主語やったんです。「いい教員になる」「いい学級経営をする」でもそうじゃなくて、「子ども」を主語にするのです。もう1つは、特別支援教育を、先生目線からじゃなく、合理的配慮という名のもとに合理的に排除している事実がいっぱいあることを問い直して、子どもの事実から学校をつくりなおすことです。

この2つが「子どもが育つ学校をつくる」のに大事な柱やなって。実は大空は、この2本の柱を中心に新しい発想で学校づくりをスタートしました。「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」これね、パブリックの学校の理念。全国のパブリックの学校です。静岡県もしかり。パブリックって公教育です。税金で運営されている、税金で給料をもらっている私たち。「大空小学校は誰のものですか」って問うと、子どもたちは当然「自分のもん」って言います。私は文科省の当時の事務次官に「地域のパブリックの学校は誰のものですか」って質問したことあるんです。その事務次官は「はい、地域住民のもんです」って即答しました。これが地域の学校なのです。校長のものでも、そこで働いている給料もらっている私たちのものでもない。地域の宝が学んでいる地域の学校です。ということは、公教育って、みんなのものでしょう。だから、どれだけ貧困であろうと、障害がであろうと、虐待されてようと、勉強全然できない子であろうと、すぐ殴ってしまう子であろうと、すべては大人の前の弱者である子どもです。これがすべての子ども。だって子どもは働かれへんからごはん食べられへん。親にごはん食べさせてもらえへんかったら命をつなぐことができないのですから。

引っ越しをしてきた子で、大空の1年生を送ってくる兄ちゃんがいました。金髪に染めて、歯抜けて、お尻半分見せて、鎖じやらじやらしながら。中学には当然いけません。この兄ちゃんの姿見たら、みんな「うえー、映画で見るみたいや」っていうぐらいひっくり返る。この兄ちゃんが、入学式の次の日に1年の弟を送ってきたんです。この子に「おはよう」って言ったら、ペッってつば吐いて行きました。でも2日目、また来るんです。「ありがとう、送ってきてくれて」って言ったら、じろっとにらんで帰りました。3日目、また送ってくるんです。私、何も言えへんかったんです。ひっくり返って帰っていくから、そのときね、お尻の穴半分見えとったんです。ズボンずらして歩くから。でっかい声で「あんた、お尻の穴見えてんで」って後ろから叫んだら、その子ズボンきゅっと上に上げて行ったんです。その翌週になって、また送ってきたから、「あんた、校則あるから、その格好で中学校には絶対入れへんやろ。九九、二の段言えるか」って言ったら「うるせえな、言えるに決まっているやろ」って言うんです。「でも七の段言われへんやろ？」って言ったら「七は無理やな」って。「中学入れてもらわれへんなら大空小学校の職員室で九九ぐらい覚えていきや」って言ったら、その日は「ほっとけ！」って帰ったんです。けれど、その次の日から大空の職員室で九九の勉強をし始めて、休み時間になったら運動場に出て行って子どもたちと遊ぶのです。母ちゃんや地域の人がいつも来ている学校やったんですけど「大丈夫ですか。あんな不良みたいな子がいてて」とか言われたので、「心配やったらそばにいて一緒に遊んどきや」って言うたら、「ああ、そうか」と。

でも、その金髪の子の近くに行けば行くほど「ああ、この子困ってんねんな」って、地域の人みんな、わかっていくんです。だから、その子に向けていた目がだんだん変わっ

ていくんです。子どもが原因じゃなく、貧困とか親がとか何かそういうことで周りの大人の視線が突き刺さってくる子どもたちって、ずたずたになって義務教育に来るんです。この子どもたちは、大人が何か声かけてきたら、また傷つけられると思うから、傷つけられる前に自分から「うるせえな」って牙を向ける。もうこれ以上傷つきたくないんです。でも、周りの大人が近くに行くと一緒に同じ空気吸うから「ああ、いい子やな」っていうことがわかる。それがわかったら、その金髪の子が、だんだん変わっていくんです。教育って難しいことはわからへんけど、人が育つ空気なんちゃうかなって、いっぱい大空で教えてもらいました。

1人でなんて何もできません。校長が何か言うて、校長の言うことを教員が聞く。こんな学校、3日で崩壊します。校長は評価をもっているからって、よく世間では言われますが、校長の言うことを聞く教職員をつくっていたら、3日で学校崩壊する。これは常に大空で誰もが言っている言葉です。同じように、先生の言うことを子どもが聞く。「こんな授業して、こんな教室つくっていたら、子どもは使いものにならへんな。親の言うことを聞く子どもつくっていたら、母ちゃん、将来困ってしまうよ」って。もうこれは大空では当たり前言葉やったんです。校長の言うことを聞く、先生の言うことを聞く、親の言うことを聞く。目的はここではない。校長の言うてこれが大事やったら、大事なことをするだけです。自分が判断するのは。主体は自分です。だから自分が学ぶんやって。このことは、ぶれそうになったら、みんなで巻き戻しをしていました。

学校は子どもが自分をつくるためにある。誰がつくるで？子どもが、保護者が、地域の人が、教職員が。「自分がつくる自分の学校」です。すべての人が当事者になります。当事者になるから、誰も人のせいにしません。うつ状態で病んでいる母ちゃんもいました。そんな母ちゃんたちは別です。そうでない人たちは9年間、クレーマーもモンスターもゼロの学校でした。だって自分の学校やから。人に文句言うてても始まらへんのです。

地域住民は地域の学校の「土」なんです。私たち、管理職も含めてですが、教職員は「風」。私は9年間「風」の立場で大空をつくる1人のスタッフでしたが、退職したらこの「風」は大空には一切吹いていなくて通り過ぎていきます。ところが地域住民はその地域に地域の学校がある限り「土」です。「土」を耕し続ける限り、地域の学校は根を生やします。

「今までは『みんなの学校』の第1ステージ」とネーミングをして私たちは去りましたが、9年間いた教職員は誰一人残っていません。校長が変わり、教頭も変わり、教職員も変わりました。今、3代目の校長になっているのでしょうか。理念はたった1つです。「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」この理念が「土」です。「土」を耕し続ける限り、どんな台風の数も吹いて時には揺れても、根が張っていたら必ず復元します。

卒業生が、つい先日メールを送ってきたんです、この卒業生のメールに、みんな今でも「校長先生」って呼ぶんですが「校長先生、生きてるか」と書いてあったんです。コロナで心配しているんでしょうね。「大空のこと、全然心配せんでええで。今はな、今のみんなが今の空をしっかりとっているで。任しときや」って。今は卒業生が、自分らやってもらったようにやって返しているみたいです。先生が力で子どもを引っ張っていたら「先生やめときや。明日からこの子、学校に来なくなるで。困るの先生やで」とか、そういうことを卒業生があたりまえに言っているそうなんです。これまでは、子どもがつくる、サポーターがつくる、地域住民がつくる、教職員がつくる。4本柱やったのが、今は卒業

生が加わって5本の柱でつくる。こんな学校に変わっていているようです。

学校と地域の関係は、ギブ・アンド・テイクでは必ずゴールが来ます。学校が上において、「地域のみなさんお願いします」上にいる学校が「お願いします」って言えへんかったら、地域の人が入ってこられへんじゃないですか。そうじゃなくて、学校も家庭も地域も違いはあれど関係性は対等です。これがWin-Win。この関係性がくずれたら、必ず子どもが困っています。ぶれたなって気づいたら互いに自浄作用を高めながら巻き戻してきました。子どもの事実がすべて教えてくれます。学校が変わったら地域が変わる。地域が変わったら社会が変わります。

10年後の多様性社会で生きて働く力

私、静岡に最初に呼ばれて、教育委員会の指導主事の方といろいろな話したときに、「静岡は、学力調査の結果、『全国で10番以内になれ』とか、とんでもないこと言われたとこと違いましたか?」と言ったんです。そうしたら「もうあの悪夢のような時は過ぎました。今はみんなしっかり前向いていますよ」って。「ああ、すごいな」ってうれしくなった記憶があるんです。この学力という言葉が、困っている子が困らない学校にできない大きな要因になっています。

大空も、開校当初はそうだったんです。だから「学力」を明確にしました。「すべての子どもに必要な学力」と「それ以外の学力」をごまかさないで明確にしました。「すべての子どもに必要な学力って、受検のための学力ではありません。『大空の子どもたちの学力高いね』って外から評価してもらうための学力と違うね」って。目の前の1人の子どもが10年後の多様性社会で「生きて働く力」です。多様性社会って、それぞれの違いをもった人が自分らしく生きられる社会でしょう。こんな社会をつくる大人になるために義務教育で子どもは学力をつけるのですから。そのために必要な学力は「柔軟な対応力」です。この力は教員の正解を子どもにインプットしてアウトプットさせるこれまでのあたりまえだと思っている教えは有効ではありません。多様性社会を生きる基本的姿勢って、お互い違っているのが当たり前なのです。違っている子どもどうしが同じ場で学んでいるから「困ったら職員室行って、それもう1回やり直ししてこいよ」って、困ったら子どもたちはいつも自分から職員室行くのです。困っていないのに「次の算数の時間は、あなたは障害がありますから、みんなの教室から離れて、特別の教室であなたに必要な勉強をしてきなさい」って、制度のもとに子ども同士分断させることはしませんでした。子どもが困っていないのに大人が手を差し伸べるから育たないのです。困ったときに「困っているから助けて」って言える子どもが育つ学校が急務です。困っていないのに合理的配慮って、これは合理的に排除しているだけだなって。今は偉そうに言っていますが、こういうことを大空のスタートでは良かれと思ってやっていたんです。でも、子どもに教えられました。だからやり直しをしたから今こうして伝えることができるのです。ただ、それだけなんですね。

2人子どもがいたら、2人とも違っているのが当たり前で、普通の子と障害のある特別の子のような「くくり」子どもを入れること。これって最たる人権侵害だと気づいたので。「特別支援教育を」と言いながら、子どもたちの分断を図っている現実を、私たちは目の当たりにして、やり直しをしました。これがすべての子どもに必要な「見えない学力」

です。見えない学力を優先すれば、見える学力は結果として向上しました。大空は「全国学力調査をやれ」って言われたときに、私は初めて教育委員会に校長として「大空は全国学力調査はなじまないのだから要りません。もしやれというんやったらん障害のある子どもは個別指導計画をもっています。この子たちの全国学力調査も個別に応じておろしてきて下さい。それならやりますと伝えました。全国学力調査の日だけ子どもたちは分断を余儀なくされるからです。だから必要ないからやらないって言いに行きました。行政の答えは「校長は行政の一員。上から言われたことを実行しなければ懲罰の対象になる」でした。帰ってきて、職員室で「こんなん言われた」って言ったら、そこからみんなが「二度と教育委員会には行くな、首になるからな」って。「1人、スタッフが減る」とかみんなに言われて怒ったり笑ったりでした。やる以上は少しでもプラスになるようにやろうってみんなまで考えたんです。学力調査のための勉強とか繰り返し過去問とか、そんなん1時間も取った学校じゃないんです。もっと必要なことで時間がいっぱいいっぱいやから。大空が開校した2年目から学力調査が始まりました。そのときは、「大阪はとても下位なので上げろ」という声が強く聞こえてきたのですが、その大阪よりも大空の子どもの学力調査の平均正答率は下でした。生活保護、就学援助50%を超えている地域で、塾に行っている子どもほとんどいなくて、宿題を家庭教育でなんて言えば次の日学校に来られへん子が何人もいました。「家庭教育は家庭に任せばいい。学校教育は学校教育で完結しよう」って、もうこれは当初から言い切っていました。「お医者さんになりたい子は勉強いっぱいしたいやろ。塾に行っている子は塾で「見える学力」高めてるやん。学校の協力は、宿題を一切出さないことやな」って言い切っていたんです。こんな状況でしたが、9年目は全国1位の県よりB問題は8ポイント上にありました。3年目ぐらいから、数値で測れる「見える学力」は常に全国よりもよくなっていました。これは単なる結果です。でも、「見える学力」を優先して「見えない学力」を後回しにしていたら、「見えない学力」は育たなかったし、「見える学力」も結果としては育たなかっただろうと想像します。それどころか、学校に居場所をなくしてしまう子どもをつくってしまっていたらと思うています。

子どもと子どもをつなぐ

特別支援教育。さっきから何回も伝えているのですが、「ふつう」と「特別」の違いを子ども同士は「対等」だと思っていますか？普通の子が特別の子どもを格下に見ている事実はないでしょうか。今は、「ふつう」の学級にいる子どもたちを問い直す必要があると思うのです。

1年目に入ってきた子です。5年間義務教育から排除されて6年生で転入して来た子どもですが、この子の母ちゃんから教えてもらったんです。「先生たち、子どものためにとって熱心な無理解者になっていませんか。先生たちは、うちの子のためにとって一生懸命給食指導をしてくれた。でもこの給食指導で、子どもはPTSDを発症して学校に行けなくなった」「校長先生、身体にいいからと言ってゴキブリが食べられますか？校長先生にとってのゴキブリは、うちの子どもにとってのキュウリと一緒になんですよ」という言葉を突きつけた母ちゃんです。「熱心な無理解者」になっていないかと言うことを教えてくれたのです。これが開校1年目の秋でした。ここから「子どものために」という言葉は断捨離しました。その代わりに、「子どもの事実」からいつも私らはやり直しをしようって。

特別支援教育は、環境をつくる教育です。障害のある子どもの個別指導ではなくて、周りの子どもを育てる、子どもと子どもをつなぐ。これが特別支援教育なんだと子どもの事実から教えられました。全国から9年の間に50人以上の子どもが「学校に行けなくなった。発達障害があります」などの理由で転校してきました。この子たち、ほとんど薬を飲まされていました。大空に来て、50人の中で薬が必要だった子どもはたった1人だけでした。その子は脳の神経に障害をもっている子どもでした。それ以外の子どもは、薬は必要なくなりました。薬より必要なのは、その子の周りの環境をどれだけ豊かに調整するかということでした。これは子どもたちに教えてもらいました。困っている子が困らなくなる。こんな学校をどうしたらつくれるだろうと言うことだけを目的にしていました。障害とか特別支援教育とかインクルーシブとか、こんな言葉は使ったことがありませんでした。

教員に必要な力って、1人の教員がいい教員になることではない。1人の教員が無理していい教員になる。そんな1人の価値観なんて一人の子どもの命も救われへんのが私たちです。教員の名人芸で子どもを育てる時代はすでに過去のものです。自分には無理って判断したら、周りの人の力をどう活用するかです。教員がいい教員になろうと思えば思うほど力を出すでしょう。先生の力に子どもが負けたら不登校じゃないですか。先生の力を子どもが超えたら学級崩壊ですよ。誰も幸せにはなりません。学びに力は要らないですよ。自分の周りにはいる若者が「校長先生、出番」とか呼ばれたら、「へい」って行きました。ベテランの教員が「あかん、私には。あんた、バトンタッチ」とか言ったら、若者が走って行って、いい感じで子どもをつなぐのです。職員室はすべての人の「安全基地」です。

大人の私らが「できない、助けて」って言える職員室をつくれへんかったら、子どもが「助けて」って飛び込んで来られるわけではないよなって。いつも口癖でした。

聴いていただいてありがとうございました。